

※ 34.

脳低温療法中における代謝動態に関する臨床的検討

八王子医療センター 救命救急部

○鬼塚俊朗, 丸谷 宏, 鈴木克昌, 鈴木秀道,
池田一美, 池田寿昭

脳低温療法は頭部外傷患者を中心とした救急・集中治療領域で広く行われるようになってきた。しかし、脳低温療法中の栄養管理についての研究は行われておらず、統一した治療計画がなされていない。今回我々は脳低温下での代謝・栄養動態を測定したので報告する。(対象及び方法) 1998年6月以降当センター救命救急部に入室し、脳低温療法を行った重症脳挫傷1例、脳梗塞3例、蘇生後脳症1例の5例を対象とした。脳低温療法は頸静脈温もしくは膀胱温を指標として34.0℃まで冷却した。脳低温療法期間中AMIS-2000質量分析装置を用いて炭酸ガス生成量(VCO₂, ml/min), 酸素消費量(VO₂, ml/min), 呼吸商(RQ), エネルギー消費量(EE, Kcal/day)を測定した。測定は脳低温療法終了まで連日午前中の1時間行った。温度により34℃の低温群, 34.5から35.5℃の復温群, 36.0℃以上の正常温群に分類し測定項目を比較検討した。統計学的検討はウイルコクソン検定を用い、危険率5%未満を有意差ありとした。(結果) VCO₂は低温群148.5 ± 72.7, 復温群181.9 ± 81.2, 正常温群227.4 ± 78.9 ml/min, VO₂は低温群145.0 ± 30.5, 復温群184.0 ± 84.3, 正常温群241.2 ± 122.9 ml/min, EEは低温群846.3 ± 63.0, 復温群940.4 ± 144.8, 正常温群1143.2 ± 276.4 Kcal/dayといずれも温度が上昇するに従い増加し、正常温群と低温群・復温群の間に有意差を認めた。RQは低温群0.831 ± 0.187, 復温群1.001 ± 0.142, 正常温群1.141 ± 0.266で低温群と復温群の間に有意差を認めた。

【結語】低温下では炭酸ガス生成量, 酸素消費量ともに減少しており代謝は低下していた。エネルギー消費量も低下を認めた。

※ 35.

The factorial structure of DAPP-BQ and NEO in Japanese sample

○Toshimasa Maruta, M.D., Makio
Iimori, M.D.,

There're many instruments to measure personality traits. Among them, Dimensional Assessment of Personality Pathology, Basic Questionnaire (DAPP-BQ) was developed by Livesley to evaluate personality disorder traits.

The purpose of this study is to investigate factorial structure of Japanese version of DAPP-BQ, and relationships between DAPP-BQ and NEO Personality Inventory. The DAPP-BQ consists of 18 dimensions. i.e.; Affective Lability, Anxiousness, Callousness, Cognitive Distortion, Compulsivity, Conduct Problems, Identity Problems, Insecure Attachment, Intimacy Problems, Narcissism, Passive-Aggressivity/Oppositionality, Rejection, Restricted Expression, Social Avoidance, Stimulus Seeking, Submissiveness, Self-Harm and Suspiciousness.

Subjects

A heterogeneous general population sample of 327 was obtained from diverse groups including university student, company employee and general community. The mean age of participants was 27.0 ± 8.8 (211 men and 116 women).

Results

Internal consistency (coefficient alpha values) in Japanese version of DAPP-BQ is acceptable for all scales. In this research, to compare with factorial structure of DAPP-BQ, we performed a principal-component analysis on the 18 X 18 matrix of scale intercorrelations four-factor solution accounted for 73.8% of the total variance. The eigenvalues were 8.59, 2.22, 1.32, 1.16. These four factors were labeled "Emotional Dysregulation", "Dissocial", "Inhibition" and "Compulsivity".

References

Livesley, W.J., Jang, K.L. and Veron, P.A. : Phenotypic and genetic structure of traits delineating personality disorder, *Arch Gen Psy*, **55**, 941~948, 1998

Livesley, W.J : Suggestions for an empirically based classification of personality disorder. *Can J Psychiatry* **43**, 137~147, 1998

36.

八王子医療センターにおける CLS 活動の現況

霞ヶ浦病院・精神医学教室

○伏見素行, 河辺昌春, 榎屋二郎, 中村珠己, 坂井乃美, 結城麻奈, 椿 雅志, 鑑江真二郎, 鈴木恵美, 鈴木康一, 安藤 治, 飯森真喜雄

東京医科大学八王子医療センターは、1980年4月に開設され、その後徐々に総合病院としての機能を充実させてきた。その過程で精神科に対する治療要請も時と共に高まってきており、精神医学教室では従来の兼科形式を一步進めた診療活動を行うようになって現在に至っている。これをコンサルテーション・リエゾン・サービス（以下CLSと略）という。

今回の研究では、活動開始以来、本年3月末までに依頼のあった患者を対象として以下の項目等について検討を加えた。

- ・依頼科の割合と件数の比較
- ・合併身体疾患とその各年ごとの推移の比較
- ・依頼理由
- ・精神疾患の既往、入院、通院歴の別
- ・自殺関連（希死念慮や自殺企図者の割合、依頼科、合併身体疾患等）

総合病院における今後の医療において、精神的問題に対する治療が必要を増してゆくことは、各所で述べられているが、このことは今回の調査研究でのCLS依頼数によっても裏付けられていると考えられる。近年精神科CLS活動の重要性はますます高まってきており、各科との協力体制やCLS活動の整備等、今後の多くの課題に役立てるべく、考察を加えた。

PA-1.

新しい EB ウイルスの調整法

(微生物学講座)

○小林 了, 江原友子, 角田修次, 水野文雄

EBウイルス (EBV) 陽性リンパ芽球株 B95-8 細胞は、細胞トランスフォーム能を有する EBV を産生する。従来、トランスフォーミング EBV を得るには、B95-8 細胞を 37°C、7 日間培養し、その上清をウイルス液として採取している。さらに、培養上清を遠心することによって、ウイルスを 100~1000 倍に濃縮して高濃度のウイルス液を得、重要な感染実験に用いている。

ウイルス濃度の測定には、EBV 陰性リンパ芽球株 BJAB 細胞に接種し、感染 2 日後に出現する EBV 特異的核内抗原 (EB nuclear antigen, EBNA) 陽性細胞%を蛍光抗体法によって検討した。

今回、我々は容易に高濃度のウイルス液を得る細胞培養法を見いだした。即ち、細胞は B95-8 株を用い、低温と短期間培養によって、原液が従来法の濃縮ウイルスよりもさらに高濃度のウイルス液となる結果を得、BJAB を使ったウイルスのタイトレーションにより、濃度が明らかな高濃度ウイルス液を調整できたので報告する。

PA-2.

悪性線維性組織球腫における DOL54 の発現

(第一病理)

○堂本英治, 黒田雅彦, 向井 清

【目的】DOL54 遺伝子は、粘液型脂肪肉腫の原因遺伝子 TLS-CHOP の標的遺伝子として RDA 法によりクローニングされた。DOL54 遺伝子産物は、その構造分泌型細胞外マトリックス蛋白と推定され、本遺伝子がトランスフォーム活性を持つこと、白色脂肪細胞の成熟過程に重要な役割を持つことが確認された。このようなことから、腫瘍発生と細胞分化の関係に興味持ち脂肪肉腫 (LS)、悪性線維性組織球腫 (MFH) など、未分化間葉形細胞由来の背景に粘液様物質を有する肉腫を対象に、DOL54 の発現と組織学的所見との関連性を検索した。